



三育学院中学校

2020年11月号

国際理解教育

三育学院中学校の修養会は、今年ニュージーランドでの研修を行う計画を変更し、国内研修プログラムに切り替えました。3年生にとっては、海外に行く機会を失ったということでも残念でしたが、福島県を訪れ、その深い歴史に触れ、美しい自然と親しみ、最後には、ブリティッシュヒルズという研修施設での充実した英語研修を実施することができました。これまでの修養会とは、一味も二味も異なった経験ができたのではないかと思います。



10/30～11/4 3年生修養会（ブリティッシュヒルズ）

「国際人」や「国際感覚」という言葉は、一般社会でも多用されていますが、三育学院中学校の行っている国際理解教育は、どのようなことを目指しているのかということについて修養会に同行して、あらためて考える機会がありました。英語をしゃべれるようになるということがその目的であるのなら、わざわざ海外に行くまでもなく、今回のような研修施設で海外からこられた講師から学ぶことでも十分にその成果をあげることができるだろうと思います。

私たちが目指している国際理解とは、次のようなことを含むものと考えています。

1. 互いの違いを認め、そのまま受け止めることができる（多様性の受容）
2. 世界基準で物事を見て、判断し、行動できる（俯瞰的視野の獲得）
3. 伝えたいことがあり、それを伝える方法に卓越している（コミュニケーション力の涵養）。

この中で、3. の伝えたいことを持つためには、物事を探求する姿勢が必要ですが、それと同時に1. の違いに気づくことができる力も求められますので、これらは互いにつながっている総合的で全人的な感覚とでも言えるように思います。

2006年夏に北浦のハンドベルを連れて中国と北朝鮮の国境の町へ演奏旅行に行ったことがありました。生徒たちは、その教会で北朝鮮から仕事で行き来している人がこの町にはいて、しばらくの間聖書を学んで北朝鮮に戻り、密かにクリスチャンとして生活している方たちが何千人もいるという話を聞いたのです。日本に戻った生徒たちは、北朝鮮で原爆実験が行われたというニュースを新聞で見るとすぐに、あの人たちは大丈夫ですかねと心配そうに声をかけてくれました。実際に見たことで人の言動が変わっていくのだということを実感した出来事でした。

エセ国際人という言葉もあるようですが、私たちの目指す国際理解教育は、単に、流ちょうに英会話ができるだけのエセ国際人を育てようとしているものではありません。実際にそこに行くこと、実際にそれにふれてみる、実際にその人に会ってみる、実際にその場の空気を肌で感じてみる、これらの体験こそが、人を変える原動力となっていくのです。私たちは、そんな国際理解教育を実践したいと願っています。

校長 尾上 史郎

わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。
わたしたちは自分で聞いて、この方が本当の救い主であると分かったからです。

ヨハネによる福音書4章42節